

IV 研究の成果と課題

1 【視点1】「対話的な学び」に重点を置いた国語科授業づくり

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題解決の過程となる言語活動を設定することで、目的意識をもって学び、自分の考えをより明確にもつことができるようになってきた。 ○ Which 型の課題提示で、全ての子供が考えをもつことができるようになってきた。また、理由を考える時間を確保できるようになり、他者に分かりやすく伝えることができる子供が増えてきた。 ○ 短冊黑板やホワイトボード等を活用し、思考の跡を可視化することで、互いの考えを共有したり、自分の考えを広げたり深めたりすることにつながってきた。 ○ 振り返る視点を発達の段階に応じて設定し、学習の振り返りを毎時間行ったことで、子供が学習内容をより自覚化したり、次時の学習を見通したりできるようになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> △ 指導のねらいを明確にした言語活動の設定の在り方をさらに工夫しなければならない。 △ Which 型の課題が文章構成を捉えることに偏っていた。他の課題を考えさせる際にも活用する必要がある。 △ 学習内容や時間のまとまりを見通して、指導事項や学習活動の精選を行っていく必要がある。

2 【視点2】複式学級の特徴を生かした指導

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 思考をつなぐ話合いの話型や複式学習の手引きを活用し、ガイド学習の充実を図ったことで、自分の考えをより分かりやすく伝え合うことができるようになってきた。 ○ 言語活動や振り返りで異学年による交流を行ったことで、分かりやすく伝えようとする意識が高まってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> △ 考えの広がりや深まりが子供一人一人のガイド力によって左右されることがある。子供一人一人に応じた指導をさらに充実させていく必要がある。 △ 国語科の学習で身に付けた力が、他教科等でより生かされるよう継続して取り組んでいく必要がある。 △ 異学年同士の交流が単元の終末の場面に偏っている。単元の導入や展開での交流、1 単位時間での効果的な交流の在り方を考えていく必要がある。

3 研究全体を通して

「対話的な学び」に重点を置いた複式国語科学習指導を通して、子供たちは自分の考えを互いに分かりやすく伝えることができるようになってきた。しかし、国語科でのこの学びが、他教科等に十分生かされているとは言い難い。そのため、他教科等の指導計画にも、言語活動を明記するなど、カリキュラム・マネジメントを充実させていく必要があると考える。また、複式学習指導における間接指導時に、子供たち主体の「対話的な学び」がさらに充実するように研究を深めていきたい。